

## ワルキューレはさまよう

### 平 山 城 児

プライベートな話題から始めたい。私は昭和十二年から三十八年まで、年齢でいうと六歳から三十一歳位まで鎌倉で暮した。少年時代の娯楽の中心は映画で、その全盛期にあたっていたので、私は母に連れられてしばしば映画館に通っていた。母がファンであったから、長谷川一夫主演の時代劇映画はほとんど見たような気がする。『阿波の踊子』『男の花道』など、いくつかの場面を今でも思い出すことができるし、のちの『或る夜の殿様』や正編続編の『蛇姫道中』などは、娯楽作品としては今日でも立派に通用する豪華な映画だと思う。『蛇姫道中』に出演していた大河内伝次郎という役者は、セリフは不明瞭だったが、殺陣ケンジンとなると拔群の動きを見せた。海岸の砂浜で数十人の侍を切り倒しながら二百メートル位の距離を全力疾走するの

である。見事であった。

余談ながら、その頃の映画館には冷暖房の設備がなかった。夏になると館の左右の窓はすべて明け放たれ、暗幕が引かれたが、風が強ければカーテンがひるがえって、差しこんだ光線で画面が白くなり大騒ぎになった。冬には、通路のところどころに設けてあるくぼみに大量の炭火がはいった。その程度の暖房でもないよりはましだった。開映のベルが鳴って館内が暗闇になった途端、再び場内が明るくなつて観客の溜息が聞こえる。アナウンスを待つまでもなく、ニュース映画のフィルムが到着しなかったからだと同承知していた。ニュース映画のフィルムは当時の鎌倉の映画館に共通だったらしく、A館のニュースの上映が終わると、そのフィルムを自転車でB館へ運んでくるわけである。そ

のフィルムが往々にして定時に届かないので、以上のよう  
な事態が生じるのだった。

当時の映画館では、そうした劇映画の前に必ずニュース  
映画を上映することになっていた。日中戦争の最中であつ  
たから、ニュース映画といつても、中国大陸で蒋介石軍と  
戦う日本陸軍の姿とか、銃後の日本を支える雄々しき乙女  
たちによる労働の風景とか、おおよそ楽しくはないフィルム  
ばかりではあつたが、テレビのない時代には実写のフィル  
ムはそれなりに新鮮な魅力もあつて、ニュース映画のファ  
ンという者も多かつた。現在は巨大なビルが林立して往年  
の光景を想像することさえできなくなつた、東京駅の八重  
洲口の出口あたりにニュース映画だけの専門館があつて、  
私も何回かそこへ通つたことがある。

そうしたニュース映画では極く見慣れた場面だが、双発  
の爆撃機（正確に記すと、九六式陸上攻撃機十一型となる）  
が編隊を組んで中国上空に殺到する。やがて、爆撃機の弾  
槽が開き、大量の爆弾がポタポタと落ちて行く。それらの  
爆弾が地上に到達すると、パツパツと白煙があがつて、か  
くて日本軍による爆撃は成功裡に終つたなどというアナウ  
ンスがかぶさってくるという、戦時中ではおなじみの場面  
であつた。当時は平均的な軍国少年であつた私がこうした

シーンを見ても、その爆撃で一瞬のうちに殺されていった  
中国の無辜の市民たちの運命に思いが及ぶはずがなかつた。  
ただ、その九六式陸攻が編隊を組んで飛行する場面のバツ  
クに流れる音楽が妙に心に残つたのである。その音楽は決  
して雄壮活潑な曲ではなかつた。というよりもむしろ、聞  
いている人間がうなされるようなメロデーであつた。たと  
えば軍艦行進曲のような能天気な曲であれば気が滅入るお  
それはないが、その曲はそうではなかつた。

当時の私はその曲が何であるかは全く知らず、そうした  
印象だけが残つたまま成人したのである。敗戦後何十年か  
たつたある日、戦争中のニュース映画に使われていた曲が  
ワグナーの「ワルキューレの騎行」であつたことに気付い  
た。当時、敵対国である英米の音楽は御法度であつたけれ  
ども、ドイツ、イタリアは同盟国であつたからワグナーの  
曲はおかまいなしでニュース映画にも使えたのである。そ  
うした事情はすぐに理解できたものの、雄壮活潑なるべき  
あのニュース映画に、なぜ「ワルキューレ」が使われたの  
か、今でも私には理解がいかないのである。

ワルキューレはヴァルキュリアのことである。北歐神話  
の中での彼女たちは、オーデンに仕える美しい戦争の乙女  
たちであるが、本来は殺戮に無上の喜びを覚える虐殺の女

神たちであった。戦場に倒れている死者たちをヴァルハラに連れ去り、彼らはそこで蘇生させられる。「ワルキューレの騎行」という曲は、そうした戦場の死者たちを求めて空中に飛翔するワルキューレたちの姿をイメージして作られた曲である。そうしたコンセプトを知った上でこの曲を聞かなくては、ワグナーの作曲した音はワルキューレたちの動きを正確にとらえていたと思われる。彼女たちは空中に浮かんでいるのだが、実は死者を求めているのであり、しかも、それは血みどろの死体なのである。空中に浮遊しているといつても朗らかな気分であるはずはなく、陰惨な重々しい想いをひきずっており、行く手には破滅的な最期が待ち受けているかもしれないのである。中国本土を爆撃する皇軍の爆撃機の飛翔するニュース映画にこのような音楽を添わせただけの一体どういう神経からか私には解らない。だが、この疑問はここでは宙釣りにしておいて、別の話題に移りたい。

「ワルキューレの騎行」の曲を最も効果的に使ったのは、フランシス・コッポラの『地獄の黙示録』であった。一九七九（昭和五十四）年に公開されたこの映画を見た時の鮮烈な印象はいまだに失せていない。のちに、劇場公開用にかットした部分も復元した、さらに長尺の完全版の『地獄

の黙示録』も見たが、もはや最初に受けたほどの刺激は受けなかった。

ベトナム戦争という愚行を、コッポラはこの作品によって徹底的に暴こうとした。この作品は、ベトナム戦争とは無関係の、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』という作品がストーリーの下敷きになっている。そのために、冒頭に近い衝撃的な部分が終わつたあと、ポートに乗ったウィラー・ド大尉がジャングルの奥へ奥へと進み、カーツ大佐のつくり上げた狂気の王国に行きつくのである。そこが「闇の奥」である。しかし、ベトナム戦争そのものと、このマールン・ブランドの扮するカーツの世界とは、本来は関係がない。

アメリカ軍はジャングル戦に悩んでいた。ジャングルに隠れてアメリカ兵を狙撃するベトナム兵に対抗するために、アメリカ軍はナバーム弾でジャングルを焼き尽くすことにした。一方では枯草剤をまき散らしてジャングルの枯死せしめた。武装ヘリによるナバーム弾の発射というのは、そういうわけで、ベトナム戦争で初めて案出された戦法であった。コッポラはアメリカ軍からヘリコプターやナバーム弾を借用できると思っていたらしいが、これほど反戦的な作品に軍部が協力するはずはなかった。止むなく、コッポラはフィリピン軍から武装ヘリやナバーム弾を借りてこの映画を

撮った。膨大な費用のかかるこのシーンの撮影にはやり直しは許されない。しかし、現実に撮影されたこのシーンはいくたの戦争映画の中でも屈指の迫力をもったものになった。

さらにこの戦場シーンを引きしめ、いかにベトナム戦争が愚行であったかを知らしめているのは、地上で米軍を指揮しているロバート・デュバル扮するキルゴア中佐の怪演であった。戦場で遭遇した花形サーファアのランスの姿を見ると、キルゴア中佐は昂奮し、ランスにサーフィンをさせるためにベトコンを殲滅するのだ、ジャングルを石器時代にしてしまえと命令を下すのである。この愚かな、しかし爆音の中ですつくと立って指揮をするキルゴア中佐の狂気の姿を今でも忘れられない。

この愚劣ではあるが激烈な武装ヘリによるナパーム弾の攻撃シーンに「ワルキューレの騎行」が使われたのである。いま、ものの本を参照すると、サー・ゲオルク・シヨルティイ指揮によるウイーン・フィルハーモニーの演奏であることが解つて、実は驚いている。コッポラは映画のバック・ミュージックといえども、決してないがしろにしていなかったのである。ベトナム戦争の時、どれだけ多くのベトナム人が殺されたか、どれほど広大なベトナムの山野が荒廃させら

れたかを思うならば、ここに「ワルキューレの騎行」を響かせることは正解以上の至当性がある。現代のワルキューレである武装ヘリの群は、何万何十万という死者を連れ去ったのである。

実はここで文章にケリをつけてもよいのだが、もう一段階「ワルキューレ」は飛ばなくてはならない。次にブルーストの『失われた時を求めて』（ちくま文庫を使用）に触れる。バルベックで馬に乗っていた話者が遠出をしている途中で、突然馬が後脚で立ち上がる。「何か異様な物音を聞いたのだった。」話者が馬を制しながら空を見上げると、「頭上五十メートルのところ」に鋼鉄製、双翼の飛行機を見つける。話者は、飛行機を見た、というだけのことを感じ、涙を浮かべて、「半神」ではないかとさえ思うのである。（「ソドムとゴモラ」「囚われの女」の中でも、話者は「二千メートル」ほどの上空を飛ぶ飛行機に関心を示している。そして、「見出された時」になると、パリの町はドイツ空軍の脅威にさらされる。空襲のたびにサイレンが鳴り、パリ市民は避難する。サン＝ルルーは言う。「いやまったく、サイレンの音楽は、『ワルキューレの乙女たちの騎行』にそっくりだったからね！パリでワグナーの音楽をきくことができるためには、まさにドイツ軍の空襲を必要と

する、というわけさ。」

ブルーストは空襲をしかけに来たドイツ空軍の姿を見てワルキューレを連想しているわけで、ブルーストがワグナーのこの曲に殺戮の生々しさを感じ取っていたからこそこのような描写がなされたのである。

ワグナーの音楽はナチによつて賞讃支持され、ヒトラーはバイロイトへ赴いて、祝祭劇場の正面玄関で待ちかまえていたワグナーの後継者ヴィニフレッドに近寄り、「やや身をかがめて、王朝風のうやうやしいキスの挨拶」をした（清水多吉『ヴァーグナー家の人々』）というほどであった。そのようにナチとワグナーとの結びつきがあまりにも濃密であったため、ワグナーの音楽は一時毛嫌いされていた。現代はそれほどではないものの、ワグナーの楽劇には、本質的に北歐神話に貫通している殺戮と死の匂いが漂っているのではないか。もしその見方が正しいとするならば、ブルーストのとらえ方も誤っていなかったわけであるし、ベトナム戦争に対するコッポラのとらえ方にも通底するものがあつたということになる。

となると、あの戦争中のニュース映画の九六式陸攻の中国への爆撃のシーンに「ワルキューレの騎行」の音楽を合わせた人物は、一体どういうことを考えていたのだろうか

という疑問にもどつてしまふのである。おそらく、当時「日映」の社員であつた某氏があの音楽を選んだのであろう。その人物がワグナーの音楽を本当に理解していたとすれば、あの日本軍の爆撃によつて殺された数千数万の中国人の死体を連想していたということも考えられる。その頃には実現してはいなかったが、やがてサイパン、グアムから飛び立って、次々に日本の都市を焼土と化するために無数の焼夷弾を落とすつづけたB29の編隊飛行のバック・ミュージックにこそ、「ワルキューレ」はふさわしかったのではなからうか。そして、広島・長崎に原爆を落とした爆撃機にも。「日映」の某氏はそこまでは考えていなかったとしても、すでに破滅への道を突き進んでいた日本の運命をどこかで感じて「ワルキューレの騎行」を選んでしまったのだろうか。

（立教大学名誉教授）